

日韓両言語の諺に現れる卑語についての一考察

金 秀 眞

1. はじめに

近来、ますます関心が高くなりつつある男女の性差問題をめぐっては諺研究の必要性を取り上げている言及は多い。吉田(1990)によると、女性と男性の違いは人類にとって常に興味のある話題で、人々の考える言語における性差は諺に大切に保存されている場合が多いと言う。今野(1988)も、諺もまた蔑視と差別をまとうものが見られると言う。박(1999)も同じ見解で、言語に対する認識や女性ないしは女性の言葉に対する意識などは諺に赤裸々に示されていると言う。

言語表現における男女の性差別的な構造を論じるものは様々であるが、本稿では、男性と女性に言及する卑語にみる男女の差に絞り、それぞれの卑語の持つ意味合いおよび性質における偏向性を指摘することにする。

両言語の諺に見られる男性と女性に言及する卑俗な意味合いが含まれている語をめぐっては、既に金(2001)「日・韓両言語の諺に見られる女性名称の対照比較研究(2)」で、女性を指す俗称を論じる際に若干触れたことがある。従って女性に言及する卑語に関する詳細はこれを参照していただきたい。

2. 分析資料と研究方法

本稿で取り扱う基本資料としては、韓国の諺の用例は「俗談辞典」(李、1980)を資料母体とし、必要な際には「우리말 속담 큰 사전(我が語の諺大辞典)」(宋、1986)や「우리말 큰 사전(国語大辞典)」(ハングル学会、1997)を参考資料として用いることにする。

一方、日本の諺の用例は「故事俗信ことわざ大辞典」(小学館、1982)を資料母体とし、「故事ことわざの辞典」(小学館、1986)を参考資料として用いることにする。

分析方法としては、両言語の男女に関する諺の中から男性と女性に言及する卑語とされる語を抽出し、それぞれの語義をはじめ、性質とともに諺の中での含意などを考察する。

3. 韓国の諺にみる男と女を言及する卑語

3.1 卑語の構成要素の一覧

韓国の諺に登場する男性と女性に言及する卑語は、下記の表1のようである。

表1 韓国の諺にみる卑語の構成

女性に言及する卑語
gye-jib gye-jib-e nyeon gye-jib-nyeon mi-chin-myeon 계집/계집애/년(계집년·미친년)
yeo-pyeon-ne ga-si-na gwa-bub-daeg gai-bo /여편네/가시나/과부대/갈보/
haw-nyang-myeon sae-chim-deogi si-si-deogi 화냥년/새침덕이/시시덕이/
chi-ma-jja-ri 치마짜리

男性に言及する卑語
sa-nae nom mi-chin-nom nal-da-rang-dong-i 사내/놈(미친놈)/날과랑동이/
nan-bong-ggun nal-tang-pae bu-rang-dang job-sal-yeong-gam 난봉꾼/날탕패/부랑당/줍쌀영감/
go-ja no-reum-ggun pal-bul-chul gi-saeng-o-ra-bi 고자/노름꾼/팔불출/기생오라비/
ggaggeun-seo-bang-nim 각은서방님

3.2 卑語の働きおよび性質にみる性差

3.2.1 対となる語

(1) 「계집」 ⇔ 「사내」

「계집」は、一般の女性や妻を蔑んで言う語で、卑俗な意味合いが大変強い。これに対し、「사내」は「남자(男)」の卑語でありながらも、一方では普遍的性質が強く働いているものという微妙な相違点が見られる。それは諺にも明白に現れている。例えば、「계집 때린 날 장모 온다(女房を殴った日に義理の母がやって来る)」「노름에 미친 놈은 계집도 팔아먹는다(博打にはまった野郎は女房さえ売ってしまう)」のような諺の用例からも分かるように、一貫して女性の下等な地位様相が示されている。

一方、「사내가 바가지로 물을 마시면 수염이 안난다(男が瓢で水を飲むと髭が生えない)」「사내는 책이요 여자는 거울이다(男は本で、女は鏡だ)」「사내는 열 계집 마다 않는다(男は十人の女を断らない)」の諺の用例では、男性に対する否定的イメージをアピールしているというより、むしろ、男性優越意識を反映している傾向が強い。

(2) 「년」 ⇔ 「놈」

「년(女)」は、日本語の「尼っ子、女郎、めろう」と似たような語感を持つ語で、大変下品な語とされている。そのため、諺には女性蔑視意識が相当反映していると言える。例えば、「미친년의 속곳 가랑이 빠지듯(氣狂い女の下着がはみ出ているよう)」「못 생긴 년이 꼴값한다(醜い女が外貌のように振る舞う)」「아이 못 낳는 년이 밤마다 용꿈 꾀다(子の産めない女が毎晩夢で竜を見る)」「아래 큰 년의 살림이라(下の口の大きい女の家政)」「살림 못하는 년이 거울만 본다(家事もうまくやりくりできない女こそ鏡ばかりみる)」「계집년 고집 센 것은 도리께 작대기로 고쳐야 한다(意地張る女は穀竿で殴らなければならぬ)」のような諺からも分かるように、家政をうまくやりくりできない女や子供の産めない女や醜い女に対する皮肉を性的に侮辱された語を用いて表現しているものがほとんどである。

一方、「놈」は、「一般の男性」を蔑んでいう語とされている。「一般の女性」もしくは「女の

子’を蔑んでいう語という意味しか持たれていない「년」に対し、「놈」は、日本語の「奴」「野郎」などに相当する語で、‘一般の男性’だけではなく、場合によっては‘動物’や‘生物’を嘲りふざけていう際にも使われているなど、より幅広い意味を持つ。上述の「년」とは違って、「계집 들 가진 늑 창자는 호랑이도 먹지 않는다(二人の女の所有したやつは虎でも食わない)」「노루 본 늑이 그를 질머진다(獐を見つけた野郎が網を背負う)」「입 빠른 늑이 손은 느리다(口の早い奴が手は遅い)」「게으른 년이 삼가래 세고, 게으른 늑이 책장 쉰다(怠け女が麻の糸を数え, 怠け男が本をめくる)」のように、男性に対する蔑視の意味を表しているとは言えない。

3.2.2 女性独自の卑語

(1) 「여편네」 「과부댁」

この二つの語は、各々‘一般の既婚の女性’と‘後家’を蔑んで言う語として定着している。これらの語の示す最も大きな特徴とは両語とも卑俗な意味合いを含む接尾辞が付いているということである。

まず、「여편네」は、「여편+네」のような構成を持つものである。この「여편네」の<네>は‘群れ’の意を持ちながら、その一方では軽蔑な意味をともに持っている接尾辞とされている。

もう一つの「과부댁(=과부댁)」は、「과부+댁」のような構成を成している。朝鮮時代(1392~1910)には嫁入りした女性を‘夫の名字’あるいは‘女性の実家の所在地’に基づき、<李姓之妻><李宅><安東宅>などのように呼んだと言われているが、ここに見られる<~댁(宅)>は意味が次第に格下げされ、後には‘妾’に対してその出身地名の後ろに<~댁(宅)>をつけて言ったと言われる。従って<~댁(宅)>は、あくまでも男性の付属物としての女性の下等な地位の様相が窺える語として捉えられる。

諺では「여편네 셋만 모이면 접시 구멍 뚫는다(女三人集まれば皿に穴を空く)」「여편네 아니 걸린 살인 없다(女かかわらぬ殺人はない)」「여편네 활수하면 벌어 들여도 시루에 물 붓기(女が気前がよければ、稼いでも蒸籠に水注ぎ)」「과부댁 종놈은 왕방울로 행세 한다(寡婦宅の下男は大きい鈴で主人顔をする)」「과부댁 은 팔아먹기(寡婦宅の銀売り)」など、一般の女性や後家に対する皮肉を物語っており、女性の無駄遣いや陰険な属性、多弁、そして後家に対する性的嘲弄を表している。

(2) 「가시나」

これは若い未婚の女性を蔑んでいう際に使う語で、日本語の「小娘」に相当する卑語として捉えられる。「가시나」^{ga-si-nae}という形でもよく用いられる。諺の中では、「복 없는 가시나가 봉긋방에 가 누워도 고자 곁에 눕는다(運のない小娘は下男の部屋に行って横になっても性不能の男の隣りに行く)」とあり、‘若い未婚の女性’に対する性的嘲弄のイメージが強い。

(3) 「갈보(蝸甫)」 「화양년」

まず、「갈보(蝸甫)」は、かつて朝鮮時代の「最下位水準の娼婦」を指す語で、中国語から由来した語と言われている。一般的に‘性的に淫乱な女’を卑しめていう語として定着されている。金(1990)によると、「갈보(蝸甫)」の<蝸>は、‘悪臭がする虫’を指す語で、主に夜中に出没し、人の血を吸い取るというイメージを持つ‘유녀(遊女)’をこの「갈보(蝸甫)」と呼んだものと言う。

諺には「딸 자식 잘난 것은 갈보 가고 논밭 잘난 것은 신작로 난다(見目好い娘は売笑婦となって行き、田畑の良いのは新道となる)」「갈보집에서 예의를 따진다(女郎屋で礼儀を論じる)」のような表現が登場している。

また、「화양년(還郷女)」という語が登場している。この「화양년(還郷女)」に関して、趙(1997)は、朝鮮王朝(1392~1910)の時、清王朝によって国を踏み躪られていた頃(1628年)から使われていたと推定される。当時は清王朝へ強制連行されて行った女性たちが数多く、その中にはいわゆる‘속환(贖還;贖錢(=保釈金))’と呼ばれていた支払いによって返還された女性たちがいた。ところが、九死一生で故郷に戻ってきた彼女たちを待ち受けていたのは、ほかならぬ‘不貞な女’‘淫蕩な女’という冷たい叱咤および非難のみであった。結局、彼女たちには‘하얀(淫蕩なめろうの意の満州語)’に、卑俗な意味の‘년’という接尾辞がつけられ、‘하얀년’と呼ばれるようになる。そしてまた、この‘하얀년’は口と口へと移されていくうちに‘환양년’の過程を経た後、最後には今日の‘화양년’に定着すると指摘している。

(4) 「새침덕이/시시덕이」

「새침덕이」は、日本語の「かまとと」のような意味を持つ語で、‘つんと取り澄ます性質を持っている人’を指す。一方、「시시덕이」は、‘浮かれてしゃべりたてる性質を持つ人’を指す語で、‘お喋り屋’‘はしゃぎ者’‘浮かれ者’の意味を持っている。特に、「새침덕이」は、「새침데기」とも言われるが、後尾の<~데기>は一般的に名詞の後尾に付いて、それぞれの名詞に示されている事柄、つまり行動もしくは性質を有した‘女’を蔑んでいう際に用いるものとして機能している。例えば、専業主婦を嘲っている際に使う<부엌데기(台所デギ(おさんどん))>や夫に疎んじられている女性を嘲っている際に使う<소박데기(疏薄デギ)>などがそれである。

ところで、ここで特記すべきことは、<~데기>は、上述のような意味を持つが、<~데기>や<~덕이>という語は、京畿地域では‘娼婦’の意味を持つ語と言われる。<~데기>は、前述の最下位水準の娼婦を指す「갈보(蝸甫)」の意味で、<~덕이>は、‘妓女’の一種で、‘密かに売春をする群れ’を指す語と認識されている。

(5) 「치마짜리」

「치마짜리」は、女性の専用物といえる‘スカート’を表す「치마」に「짜리」という語が付

いた構成を成している。ここでいう「~짜리」は、大体名詞の後ろに付き、接尾辞の役割を果たす語で、身なりでその人を卑しめて呼ぶ語とされている。従って、「치마짜리」はスカートを履く対象者、つまり女性を蔑視する気持ちを表すのに用いられている。「치마짜리가 똑똑하면 승전막이 갈까(チマチャリが賢くても、承伝幕¹⁾が行くもんか)」の諺に示されているように、スカートをはくものがいくら賢くても、男性の職位までには至らないという意味が含まれているもので、女性に対する蔑視意識とともに男性優越意識を反映しているものとして捉えられる。

3.2.3 男性独自の卑語

- (1) 「^{nal-pa-ran-dong-i}날과람동이」 「^{nan-bong-kun}난봉꾼」 「^{nal-tang-pae}날탕패」 「^{bu-rang-dang}부랑당」 「^{no-reum-kun}노름꾼」

「날과람동이」 「난봉꾼」 「날탕패」 「부랑당」 「노름꾼」などは、いわゆる‘放蕩者・道楽者・遊び人・悪性者・不良者’などを指す語として用いられるものであり、いずれも‘不正な性質や行為’を示す事柄とかかわっている。「날과람동이」は、‘粗忽に振舞いながらうろつき回る人’、「날탕패」は、‘無一文であるくせに体面などは考えずに陽気に浮かれる遊び上手な人’、「난봉꾼」は、‘言動がまじめではない放蕩な人’、「부랑당」は、「^{bul-han-dang}불한당(不汗党)」が転化した語で、‘他人の財産を無理やりに奪い、不埒な行いをしながら振り回る群れ’あるいは‘人を苦しめる事を日常茶飯事のように行う人’を意味する。これらの語にはそれぞれ「~^{dong-i}동이/~^{gun}꾼/~^{pae}패/~^{dang}당」のような接尾辞的な性質を有する語が含まれているが、「~^{dong-i}동이」を除いてはいずれも‘群れ’ ‘団体’ ‘集まり’などの意味を持つ語である。

- (2) 「^{jom-sal-yeong-gam}좁쌀영감」

「좁쌀영감」は、「^{jom-sal}좁쌀(粟)」に‘年老いた男’を罵っている「^{yeong-gam}영감(令監)」が付いた構成を持つ。「좁쌀(粟)」は、一般的に‘細かい’というイメージに基づき、‘偏狭で思慮が浅く融通性に欠いた年寄りの男性’を嘲っている際に一つのたとえとして用いる語である。従って、この「좁쌀영감」はあくまでも男性なら‘深い思考’および‘大胆さ’を持つべきだという認識が込められている語として捉えられる。

- (3) 「^{gi-saeng-o-ra-bi}기생오라비」 「^{gagagan-seo-bang-nim}각은서방님」

「기생오라비」 「각은 서방님(削った書房(=身なりに念を入れる男))」は、さっぱりした身なりをした男性を指す語で、常に身なりばかりに念を入れる男性を嘲る気持ちが強く込められている。諺の中では「각은서방님(削った書房(=身なりに念を入れる男))」 「기생오라비 같다(妓生の兄のようだ)」のように現れている。

- (4) 「^{go-ja}고자(鼓子)」

‘生殖器の不完全な男’を指す卑語とされている。「복 없는 가시나가 봉긋방에 가 누워

도 고자 곁에 가 놓는다(運のない女は下僕の居所へ行っても、性不能の男の傍で横になる)」「고자 처자집 다니듯 한다(性不能の男が妻の実家に通うようだ)」の諺に示されているように、性不能の男に対する皮肉を物語っており、いずれも利益のないことをするの意が含まれている。

(5) 「팔불출(八不出)」

「계집 자라는 삼불출에 하나요 자식 자라는 팔불출의 하나다(女房自慢は三不出の一つよ、子自慢は八不出の一つだ)」に登場している「팔불출(八不出)」は、‘大変愚かな男’および‘馬鹿な男’を指す卑語とされており、ここでは口の軽い男性に対する皮肉を表している。

4. 日本の諺にみる男と女に言及する卑語

4.1 卑語の構成要素の一覧

日本の諺に見られる男と女に言及する卑語は下記の表2のようである。

表2 日本の諺にみる卑語の構成

女性に言及する卑語	男性に言及する卑語
小娘 / ^{おばさん} 姥桜 / 年増 / 悪女 / 醜婦 / ^{しこめ} 醜女 / おかめ / おたふく / 手掛け / ^{いすめ} 石女	色男 / 小僧 / 間男 / 密夫 / 小男 / 大男 / 虚仮

4.2 卑語の働きおよび性質にみる性差

4.2.1 女性に言及する卑語

(1) 「小娘」

韓国の諺に見られる「계집애」ないし「가시나」に相当する語と言える。

日本語の「小」は、体言や形容詞の語頭に付く接頭語の一種で、軽んじあなどの意を表す語とされている。従って「小娘」は、この「小」の働きによって‘若い娘’を軽んじあなどの意を込めている語としての機能を持つと言える。

‘若い未婚の女性’、つまり‘一般の娘’を軽蔑の意を込めている語であるだけに、諺の中では「小娘と茶袋」「小娘と煎り豆、前にあると手が出る」のように現れ、‘小娘’が男性の主たる性的嘲弄の対象物として扱われている傾向を示す。

(2) 「姥桜」

これは本来‘葉より先に花をつける桜’を指す語であるが、‘葉のない桜’を「歯のない桜」

にかけていったものへと転化し、女性に言及する語として働くようになったものと言える。「姥桜」は、
‘年をとっても色気のある女性’あるいは‘あだっばい年増の女性’を指す卑語とされている。

諺の中では、いい年をした女が色恋の道に分別をなくすという内容を示す「**姥桜**の狂い咲き」とあり、良いイメージというより、むしろ性的に侮辱されている傾向にあると言える。

(3) 「年増」

「年増」は、結婚の有無を問わず、‘娘盛りをすぎて少し年をとった女性’あるいは‘中年の婦人’などを指す語として働くものである。江戸時代には二十歳すぎ、今は三十～四十歳ぐらいの女性を指す語であったと言われている。

諺の中には「色は**年増**に止め刺す」「酒は古酒、女は**年増**」とあり、ここに見られる「年増」は、いずれも女性に対する性的嘲弄を反映したものとして捉えられる。

(4) 「悪女」「醜婦」「^{しこめ}醜女」「おかめ」「おたふく」

これらの語はいずれも‘醜い女性’を指す語である。

諺の中では「**悪女**の賢者ぶり」「**悪女**の深情け」「**醜婦**も空房よりは勝れり」「鬼に千振、**醜女**に辛子」「売れ残りの**おかめ**」「おたふくが甘酒によったよう」のような表現が現れており、表現のほとんどが‘醜女’に対する蔑視意識を反映している。

最も多く用いられている「悪女」は一般的には‘性質・心の悪い女’という意味を持っているが、諺の中では‘憎い女’という意味で用いられている。また、「醜婦」「^{しこめ}醜女」は、「悪女」の同義語として位置づけられているものであるが、ここに見られる「しこめ」は、醜悪なこと、または憎しみ罵ったり、卑下したりする場合に用いる語の<^{しこ}醜>に女を表す<女>が結び付けられた語構成を持つ古風な言い方である。この「^{しこめ}醜女」に対しては、「^{しこめ}醜男」という男性名称が存在するが、諺の中には見られない。

なお、‘醜い女’を指すこれらの名称の他にも、「おかめ」「おたふく」のようなものが見られる。「おかめ」は、‘太って額や頬が出ていて、鼻が低く、丸い、女性の顔をした女’を指す語で、‘醜女’を指す語の代表格とも言える。これは顔立ちの悪い女性を嘲ってという語であるだけに、女性に対する蔑視語の一種として捉えられる。上記のような女性の‘外貌’に基づく卑語は日本の諺の方にとりわけ多く見られる特徴と言えよう。

(5) 「^{てか}手掛け」

「手掛け」⁽²⁾は、‘妾’を指す俗称に当たるもので、‘手にかけて愛する者’という合意が持たれている。これは男性本位の立場に基づいて創られた語である傾向があり、女性を男性の付属物とみなす思考が強く込められている語でもあると言える。

(6) 「石女」

「石女」は、「産まず女(め)」という意を持つもので、つまり「子供が産めない女性」に言及する卑語と言え。諺の中では「淫婦に石女多し」のように現れており、これは「子の産めない女性」に対する否定的認識に基づいて生まれた語と言え。このような認識は儒教の影響で、つまり女性に対する儒教倫理の主たる項目の中には、夫が一方的に妻と離縁する事ができる条件を述べた「七去之悪」というものがあり、<舅姑への不服従><不妊><淫乱><悋気(嫉妬)><悪疾><多弁>の七つの条件を含む。この中でも、女性の<不妊>や<淫乱>は離縁できる最も重要な条件とされていた。

4.2.2 男性に言及する卑語

(1) 「色男」

池田(1959)によると、「色」ということばは、中世頃からあまりよくない語感を伴うようになり、今日に至っている。「色」は、「情婦」を意味し、こういう場合の色は主として女性に限ってのみ使われるようで、「情婦」の方は「色」を用いず、「色男」を用いるのが普通のものである。そして色男の方は、情人情夫の意味から一步抽象化して、情人たるにたり、いい男というようなところまで進んでいる。「色男」に対する語は「色女」であるが、これはいと同様情婦を意味するが、いい女という意味には普通用いられないようであると見解を述べている。

「色男金と力は無かりけり」「色男は茶漬け飯」「色男より稼ぎ男」に示されているように「遊女の情婦」と「美男子」あるいは「いい男」という二重の意味で使われており、経済的な能力を持たない男に対する否定的な認識を示している。

(2) 「小僧」

‘年少の男子’をあなどってという語とされている。

そもそも‘年少の僧’あるいは‘商店などで雑用に使う少年の店員’、つまり「丁稚」を称する語でもあったもので、今日は女性に言及する「小娘」のような卑俗な性質が持たれている語としてその役割が一層強められ、「いたずら小僧」のように親しみの気持ちを込めて接尾語的に使う場合が多くなってきている。

諺の中では「小僧に天狗が七つ付いている」のように現れる。これは子供の動作のすばやいことを表しているだけで、軽視意識が込められているとは言えない。

(3) 「間男」「密夫」

「間男」「密夫」のような女性の浮気の相手を指す語が幾つか見られる特徴がある。

「間男」「密夫」は、「有夫の女と密通する男性」を意味する語、いわゆる‘情夫’を指す。このうち、特に「密夫」という語は字義そのもので解すると、「密かに隠している夫」となり、「正々堂々表に出せない者」の意味が含まれている。このような語が見られるということはある意味では‘女性の浮気は不貞なもの’という認識が広められていた事を示唆する。‘男性の浮気の相手’を

指す語として「密婦」という形が存在しないことは‘男性の浮気’はごく普通のことのように容認されていたことを意味すると言える。

諺の中では、「**閨男**を知らぬは亭主ばかり」「盗みは貧から、**密夫**は栄耀から」のように現れており、正常な付き合いではないためか内容面でも皮肉の気持ちが相当強く込められている。

(4) 「小男」「大男」

「小男」「大男」は、外貌に関わる蔑視的性向の強い卑語の一つとして捉えられる。言葉通りに「大男」は‘普通の男に比べて体がずばぬけて大きい男’を、「小男」は‘普通より背丈の低い小柄の男’を指す語である。

「**大男**総身に知恵が回りかね」「**大男**の小摩羅」「**小男**の腕立て」に見られるように、諺の中に見られる「大男」は、‘体ばかり大きくて愚鈍な男’を意味し、「小男」は、‘小柄で弱い男’を意味する。

(5) 「虚仮」

気質に関わる語で、「虚仮」は、‘思慮の足りない愚かな者’を指す古風な言い方であるが、主に男性に用いられる語である。

「**虚仮**ほど恐ろしいものはない」「**虚仮**が居酒屋で酔ったよう」に現れているように、‘愚かな男性’に対する皮肉を表している。

5. おわりに

最後に、今回の分析から得られた知見を要約することによってむすびたい。

まず、韓国語の諺に見る卑語の場合、‘男性は外、女性は内’といったいわゆる性的役割分業意識および男性優越意識に基づいて創られた傾向が強い。要するに、女性に言及する語は、主に、家政をうまくやりくりできない女、子供の産めない女、貞操を失った尻軽女、貞淑ではない女に対する蔑視意識の下で創られた卑語の構成が目立つとともに、性的に侮辱された卑語が全般を成している。これに対し、男性に言及する語は、主に、男性の反社会的で男らしくない言動、そして男性の無能力(生殖能力・経済力)に対して侮辱されている傾向がある。従って韓国の諺に見る卑語の場合、女性に言及する語は、男性に言及する語に比べ、片寄った含意が付与されていることが指摘できる。

一方、日本語の諺に見る卑語の場合、女性に言及する語は、主に、外貌や年齢と関連して性的に侮辱された卑語の構成が目立っていると同時に、韓国の場合と同様に子供の産めない女に対する蔑視意識に基づいている卑語が全般を成している。これに対し、男性に言及する語は、女性の場合と同じような外貌と関連した語をはじめ、男性の色遊びや経済力と関連した卑語の登場が目立つ。韓国語に比べ、性差的な格差は明らかでないことが指摘できる。

【注】

- (1) かつて王の命令伝える役割を担当を果たしていた官僚を指す。
- (2) 「手掛け」に関する詳細は金(2001)を参照のこと。

【参考文献】

- 趙恒範(1997)、「다시 쓴 우리말 어원 이야기(改めて書いた我が語の語源話)」、韓国文院。
- ハングル学会(1997)、「우리말 큰 사전(国語大辞典) 全2巻」、語文閣。
- 池田弥三郎(1959)、「民俗故事物語」、河出書房。
- 金秀眞(2001)、「日・韓両国の諺に見られる女性名称の対照比較研究(2)」、「NIDABA」No.30、西日本言語学会、pp.124-133。
- 金用淑(1990)、「韓国女俗史」、民音社。
- 今野敏彦(1988)、「蔑視語—ことばと性別」、明石書店。
- コーツ, ジェニファー著 吉田正治訳(1990)、「女と男とことば」、研究社。
- 李基文(1980)、「俗談辞典」、一潮閣。
- 임중국(1995)、「한국인의 생활과 풍속(韓国人の生活と風俗(上))」、아시아文化社。
- 박창원(1999)、「여성어 연구사(女性語研究史)」、「언어와 여성의 사회적 지위(言語と女性の社会的地位)」、pp.43-83、대학사。
- 尚学図書編集(1982)、「故事俗信ことわざ大辞典」、小学館。
- _____ (1986)、「故事ことわざの辞典」、小学館。
- 宋在璇(1983)、「우리말 속담 큰 사전(我が語の俗談大辞典)」、端文堂。